

目的 中庸集合住宅の住棟まわり空間が 居住者の生活行為の場としてどの程度活用されているかを認識し、その使い方を明確にすることが目的に研究を進めてきている。前回才子報は、人々の行動特性について述べたが、<sup>1)2)</sup> 本報では長期にわたる固定的な利用である花壇の現状について検討する。

方法 住棟まわり空間の視察・測定調査と居住者へのアンケート調査。調査期間は57年から60年。対象は住宅・都市整備公団の賃貸で 團地、御影、津雲台、青山台、玉川橋、平城、泉北柳山台の5か所から58年の建設の7団地。

結果 花壇面積は8%~0.5%と団地により違っている。花壇の盛んな団地では各階の居住者が戸外で行なっているが、盛んな所では、1、2階の居住者が70%とある。住棟まわり空間での花壇活動に對して70%の居住者が賛成しているが、建設年の新しい団地ほど反対が多い。賛成の理由は「目を樂しませてくれる」「四季の變化を感じる」などである。一方、反対の理由は「共用地を私用することは良くない」「手入れが行き届いていない」である。以上のことから、住棟まわり空間は共用地であり私的に利用することは良くないという原則的に認識はあるが、しかし、かたりの人が花壇活動をしていふこと、また、手入れを適切に行なうのであれば、花壇は人々の目を楽しませ、季節を感じさせてくれるものとして評価されることは確かである。従って、住棟まわり空間を戸外の日常生活の場と考へ、花壇の場として活用せよということについては、管理団制を念頭に、新たに計画的観点から考へることが必要である。

2) (社)日本家政論 第4回大会発表要旨